

青森県の三内丸山遺跡や鹿児島県の上野原遺跡など、最近とみに縄文遺跡が話題になってきた。その縄文時代にあって、熊本が列島内でも人口密集地の一つであったことはあまり知られていない。それは約3千年前、縄文後期末から晩期前半にかけてのことであった。

突如ともいえるほどに、熊本県北部の肥後台地のうえに大規模な集落が出現し、その数を増した。熊本市太郎迫や泗水町三万田など数ヶタール単位の遺跡もある。その規模と密度は当時としては最大級で、それにもない人口密度も高かつたと考えられる。

遺跡は浸食谷に面して位置し、背後にひろい台地をもつのが通例である。打製石斧(鉶)が多量に出土するのも特徴で、原始的な農耕を推測する学者もいるほどである。

そこから出土する興味ある遺物に土偶がある。土偶は東日本に多く、西日本での発見は各県平均して数個程度にすぎない。そのよう

な中、熊本市を中心とする大遺跡からは四〇を越す資料が出土していく特筆される。宇宙人を思わせる東北地方の遮光器土偶や鳥に似た埼玉地方のミミズク土偶などは教科書でもよく目に見る。しかし、数が多いにもかかわらず熊本の資料が図版を飾ることはまずない。その最大の原因是、熊本の土偶がおとなしいからである。

それでも幾つかの土偶にはニックネームを付けたくなるものもある。(1)は俗に「火の国のビーナス」と呼ばれている資料で、両腕を欠いているだけで最もスタイルをよく残した土偶である。脚は太くて短く、胴はムッチリとして、大きな乳房が付く。顔面は縁を沈線で囲み、その下部に大きな窪みで口だけを表現し、目鼻はない。

(1)が「ビーナス」ならば(2)は「火の国のナリザ」と言いたい土偶である。手足を欠いているが、偏平な胸に縦長の乳房が付き、いかにもタラチネの母に相応しい。横長の顔面には両側に耳を作り、真ん中に短線を二本引いて目を現している。こちらには鼻口の表現はない。簡単な顔つきであるが、何だか笑っているように見えるのは不思議である。

縄文時代の熊本の顔

原始古代部会

富田紘一

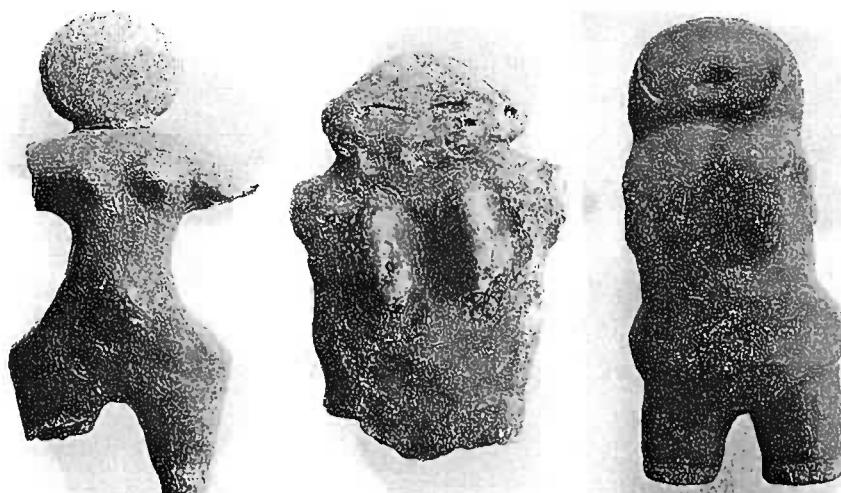


発行日
1997(平成9)年10月1日
編集・発行

熊本市
新熊本市史編纂委員会

熊本市手取本町1-1
市史編纂課
☎328-2038・2903

| ▽縄文時代の熊本の顔 | |
|-------------------|------------|
| ▽「史料編第六巻近代I」 | を刊行して..... |
| ▽「通史編第八巻現代I」 | を刊行して..... |
| ▽木造阿弥陀如来坐像一躯 | |
| ▽昭和二年現在、熊本県下の新聞雑誌 | |
| ▽史料調査にご協力いただいた方々 | |
| ▽編集後記 | |
| 12 | 12 |
| 8 | 5 |
| 4 | 3 |
| 5 | 1 |



③ 上南部遺跡

② 四方寄遺跡

① 竹ノ後遺跡

目次

「ビーナス」「モナリザ」ときたら③にも何か良い名前を付けてあげたい。しかし、こちちは目鼻□何もないノッペラボウで、名付け親も悩んでいる。前の二つとは違い、ウエストは大きくびれ、胸には小さいが形のよい乳房が付く。

腹部はふくらみ妊娠をあらわしており乙女ではないが、神話には処女受胎があるので「火の国」のマリア」とでもしておこうか。

これまでの全身が残る資料と違い土偶の大多数はコナゴナに破壊されている。その中で④～⑪に示したのは熊本市内から出土した顔面部のみの資料の一部である。何とか表情を保つものを選んだ。

④⑥⑦に②を加えた四点は顔が横長の土偶である。④では隆頭で眉と鼻をつけ、□はない。造作を隆頭で作るのは、これ以外には泗水町三万田遺跡の二例のみで、ごく珍しい。⑥は間のひらいた小さな目と大きな□のほかに、平行線や刺突や星印などが付けられている。顔面の表現のほかにはなはだ賑やかな飾りをつけている。⑦では細い横線を目とし、丸い窪みを□としている。次の丸顔に比べると、この方が表情をもつものが多い。

⑤⑧⑨⑩⑪に①③を加えた七点は丸顔の土偶である。⑤は中央に窪めた□とその上にかすかに二つの小さな目がある。一見赤ちゃんのようであるが、立派に胸はふくらんでいる。⑧は首の細い丸顔の中央に「V」字状に束になつた細線を付けており、一見眉の表現のように思われる。⑨は大胆に省略した入道頭に笑うような□だけがある。⑩は両側に耳を表

現するのみで、顔面部は全く何にもなく磨き上げているのみである。⑪は二重の弧線を合わせて目?をあらわす。弧線の間に、細い斜線をつけていて、眉毛なのか、それとも睫毛の表現なのか。

⑥⑦⑩⑪に②を加えた五点は両端に穴が貫通して耳または耳孔と思われるものを表現している。関東地方のものでは耳栓(ピアス)を付けたものもあり、その省略形かもしれない。⑩では目□鼻ともにくて、ただ耳だけを付けており、よほど象徴として大事に考えられたものと推測される。

熊本地方の縄文文化をみると、土器でも土偶でも、その中心となつた東日本から西日本へ、そして九州の熊本へと伝播するなかで激しく省略化される傾向にある。九州の土偶の元になつたのは関東地方の加曾利B式土器にともなう山形土偶とよばれるものである。立体的に誇張された顔面の造作も、目□の窪みのみに単純化される。その後には目もなくなり、最後にはノッペラボウになつてしまつ。しかし、デフォルメにデフォルメを重ねて何ともしなくなつたものより、人の本質をよく示しているようにも思える。

ひるがえつて現代に目を向けると、熊本では顔の表情をつかつた意思表示が下手のようである。顔を変えないのが美德と考える人も少なくない。はるか縄文の昔から、これが熊本人のモノイイだつたのだろうか。



⑦ 上南部遺跡



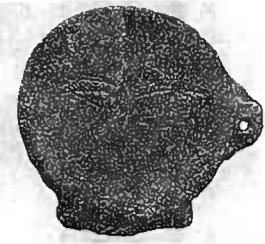
⑥ 太郎追遺跡



⑤ 太郎追遺跡



④ 太郎追遺跡



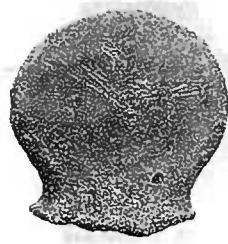
⑪ 新南部遺跡



⑩ 上南部遺跡



⑨ 上南部遺跡



⑧ 上南部遺跡

『史料編第六卷近代I』

を刊行して

近代専門部会

花立三郎

『史料編近代I』は、明治二年（一八六九）

から明治三八年（一九〇五）までの、主として熊本市に關係ある史料を、政治、行財政、産業・經濟、軍事・警察・消防、社会、政育、文化・宗教の七分野に分けて、それぞれに編年体に並べました。近代日本を明治から昭和二〇年（一九四五）八月一五日までとしますと、これで近代日本前半の熊本市の歴史が史料的に筋が通されたわけです。筋を通すということは、歴史を理解するうえで非常に大切なことです。現代の熊本を見、考るためには近代から考えることが必要です。現代の熊本市の問題は実に近代の熊本市のあり方、施策にその源を発しているからです。

熊本市は昔から「軍人の町」といわれてきましたが、それは鎮西鎮台—熊本鎮台—第六師団が熊本市に置かれたことに深くかかわるわけですが、それを史料的にはつきりみていただきたいのです。「鎮西鎮台の設置」（五八二頁）、「熊本鎮台の設置」（五八六頁）、「熊本管区表」（五九三頁）などの史料がつきます。この軍隊と熊本市の發展をめぐつ

て、いろいろと関りをもつていきます。それは市区改正上の問題として浮び上がつていますが、「山崎練兵場交換問題事実ノ真相」（三八一頁）やその他関連の史料が集められています。これらの史料をみると、当時の人びとの考え方や生活の状況を知ることができます。現在の市区改正問題の源泉がここにあります。私どもは先輩の哀歎を無視してはならないと思います。

筋を入れるといえば、熊本市および熊本全体の經濟・産業史を史料的にまとめることができました。もとより充分ではありませんが、これで熊本の近代經濟産業史の展望ができるものと思います。熊本近代史においては經濟産業史の研究が非常に遅れています。本書は遅れているその方面的研究に一石を投ずることになるだろうと期待しております。

熊本は昔から「教育県熊本」といわれてきて、熊本の人びとの自慢の一つであったことは多くの人びとがすでに御承知のことです。ところがこの輝しい「教育県熊本」で實に不思議なことが起ります。明治二〇年（一八八七）一二月の熊本県会で、県立熊本中学校の二年度予算が削除され、唯一の県立中学校が二年三月に廃止されるという思いもよらぬ事件に發展したのです。そのときたとは残念ながらいえないようです。むしろその対策は外国人によつて手をつけられ、しかも外国人にまかせきりというのが實際でしょう。リデル・ライト関係の史料を集めてみました。この問題の深さとむつかしさを考えて下さい。「ハンセン病問題」として三件の記事をかかげましたが、「日本のハンセン

ためには非常に重要な要素ですが、その政党が党利ばかりに走つてしまつては、民主政治の打ちこわしになります。政治が教育を思うように支配するということになれば、これはどの不幸はないのです。「教育県熊本」といわれるかげにこのようあるまじき問題が起つているのです。「県立熊本中学校の廃止」（八七八頁）に詳しいのですが、これは新聞記事を取つたもので、速記録的記事なので臨場感溢れるものがあります。歴史はあるがままの事実をきびしく見つめる必要があります。冷厳なる事実の前に立つて、過去の歴史を教訓とすべきです。

外にも難しい問題があつて、熊本では教育界に厄介なことは事欠かないのですが、それでも熊本ではそれなりに教育の仕事を仕上げて今日までやり上げてきているのであって、それはそれとして先人先輩の苦労を史料的に見ることができます。

ハンセン病と熊本との関り合いは古く長い問題です。それは徳川時代から始まり、戦後にまでその影響を残すという深刻な問題です。それに対して行政や熊本市民が手をつくしてきたとは残念ながらいえます。むしろその対策は外国人によつて手をつけられ、しかも外国人にまかせきりというのが實際であります。この問題の深さとむつかしさを考えて下さい。「ハンセン病問題」として三件の記事をかかげましたが、「日本のハンセン



「病患者」(七二二頁)はハンナ・リデルの手紙を訳したもの、「熊本における伝導活動」(七二三頁)「癪患者の寺」(七一七頁)は当時のリデル等の活動を述べたものです。三篇とも翻訳で、前二者は初めてのものです。熊本市民に初めてのものといえば、明治二年正月、多数の肥後藩兵を乗せたハーマン号が津軽沖で座礁して数百人の死者を出した惨事を知っている人は多くないと思います。また熊本からの移民についての珍らしい史料も集めることができました。

これらのこれまで余り知られなかつたことによつて、より正確により詳しく熊本市を知つていただけたら幸いです。より確かな史実に立つて、物事を考え議論をすすめていけば、私たちの生活も随分むだが省け能率的になつていくだろうと私は考えています。この史料編が今後市民の皆さんの考え方や議論の依りどころとなることができれば、私どもの努力の甲斐があつたというべきです。

内容は第一編「新しい時代の訪れ」と、第二編「高度成長の光と影」から成る。第一編は昭和二〇年から三二年まで。敗戦という厳肅な試練に屈せず、戦後の苦難を乗り切り、さらに二回にわたる大水害をも克服して、逞しく街づくりに励む市民の姿が、そこにある。

第二編は三三年から四六年まで、わが国はようやく安定期を迎えるが、この中にあつて福祉、文教、中枢管理都市熊本の実現に、行政と一体となつて取り組む市民の心意気、その鼓動が、さまざまな角度から描かれる。

これまで現代部会では新聞史料編、史料編と取り組んできた。部会員一同がひとしく痛感していることがある。それは「現代」は他の時代と比べて大きく違つてある点がある、ということだ。現代は多くの市民が生活の時

『通史編第八卷現代I』

を刊行して

現代専門部会

平野敏也

間と空間とを共有している場である。従つて記述される文章内容には、背景に利害関係者があり、それだけに一言一句にも、慎重な配慮が求められるのである。

例えば先の大戦の呼称について、問題が出てくる。これを「大東亜戦争」とするか「太平洋戦争」とするか、これを記述する人の歴史観によって、その表現が異なつてくる。現代部会の記述対象は八月一五日以降である。これを「終戦」の日とするか、「敗戦」の日とするか、私たちに検討が迫られる。

平成八年八月一五日付の新聞各紙を開いた。各紙ともこの日を「五一回目の終戦記念日」と表現している。「天皇陛下のお言葉」の中には「顧みれば終戦以来既に五一年」とある。

この日の「熊本日日新聞」の読者投稿欄には「敗戦の日」との文言も一個所みられた。ちなみに平成七年、当時の村山内閣は「終戦五〇年決議」を可決している。

こうみてくると、敗戦という現実は否定できないが、歴史的用語としては「終戦」が定着しており、妥当と考えたのである。

もちろんわが国が「アジアの諸国民に対して、多くの苦しみと悲しみを与えた」(五一回全国戦没者追悼式における橋本首相式辞)ことは、率直に認識し、襟を正すべきはいうまでもない。

『新熊本市史』は文字通り、市史である。同時に市民史であり、地域史であると考えている。熊本という街をつくり、誇りある街と



よく言われるが「人が歴史をつくり、歴史が人をつくる」。先哲の功績を讃えるとともに、その心をわが心とし、今の生活の中に生かしたいと思う。

熊本市には名譽市民表彰の制度がある。それは市民の師表として仰がれる人びとである。本編では「点描」のタイトルで、昭和三〇年一月表彰の徳富蘇峰と高橋守雄、三五年四月表彰の細川護立と福田令寿、四四年一〇月表彰の宇野哲人と堅山南風の六氏の人となりや業績を紹介した。

なすため、歴史を支えているのは、他ならぬ市民である。この方針に副い、執筆の視点もここに定めている。
本編ではこのため、いくつかの「書き書き」を行い、市民の生の声を聞くとともに、その意識や生活を忠実に文字化することに努めた。対象者の基本的人権が損なわれないよう、配慮したのはもちろんである。

木造阿弥陀如来坐像 一躯

熊本市硯川町字庄・庄阿弥陀堂
中世専門部会
大 倉 隆 二

熊本市硯川町字庄の公民館横にある庄阿弥陀堂には、中世にさかのぼる五輪塔など石造

遺品が集められていて、この一帯が往時の寺院跡であることを知る。だが、地誌類にも特に触れたものもなく、これまでその重要性に気づかることはなかつた。
さて、本像は傷みもひどく何回かにわたる後世の稚拙な修理のため、正面から拝見しただけで造立年代を推定することはなかなか難しいが、(1)胸元を大きく開いて背筋をすつと延ばした姿勢、



(2) 像底からみた構造、特に像の干割れを防ぐために頭・体部をとおして背面から内刳を施し背板を当てる方法、

(3) 材の朽損具合、

などから平安時代後期の造立と推定される。さらに、樟材による大らかな作風からこの地で造られたこと、また修理の際に膝裏や背板（いすれも後世の補修材）に書かれた墨書き铭から、元々阿弥陀像として造られたものと思われる。銘文は膝裏など書きにくい場所に書いてあり、文体も稚拙で読みにくいが、およそ次のように整理されよう。

「右古佛阿弥陀、此造楠木、次奉寄進、為先祖菩提、鹿子木八十町内庄村内辻屋敷兵左衛門子孫善三郎・甚左衛門、佛師ハ桑鶴村之寂靜造、次彩色仕申候、以上、享保壬寅七年十月吉日」

「享保壬寅七年〔十月吉日〕、右聖武天皇御□行基大僧正御作、〔 〕阿弥陀佛八幡大菩薩ト現ス、肥後國飽田郡鹿子木八十丁内庄村守護法佛、〔 〕桑鶴村寂靜」

ために桑鶴村の仏師寂靜に依頼して修理したということになる。もとより、造立の年代は様式からみて平安時代後期一一一二世紀ころで、奈良時代のものではないし、台座・光背は江戸時代の補作である。

本像が造られた平安時代後期は、「朝題目、夕念佛」と称されたように、法華経を中心とした浄土教思想が全国的に流布した時代で、阿弥陀如来の信仰が盛んとなり、その傾向は鎌倉時代にまでおよんだ。かくて、京都の皇族や貴族たちばかりでなく、地方でも有力者たちは競つて阿弥陀堂を建て、来世の極楽往生を祈つた。藤原頼通が嘗んだ宇治の平等院



日誌抄

1997年（平成9年）前半

- | | |
|-------|--|
| 1・7 | 第41回 近世専門部会（史料編「近世Ⅲ」の筆写史料の検索） |
| 1・8 | 現代史料調査（通史編「現代Ⅰ」の校正） |
| 1・9 | 第34回 中世専門部会（通史編「中世」の編集項目） |
| 1・10 | 現代史料調査（通史編「現代Ⅰ」の編集校正） |
| 1・11 | 自然史料調査（植生図作成、航空写真との誤差確認） |
| 1・12 | 自然史料調査（植生図作成、航空写真との誤差確認） |
| 1・15 | 近世史料調査（史料編「近世Ⅲ」の筆写史料の検索） |
| 1・16 | 現代史料調査（通史編「現代Ⅰ」の編集校正） |
| 1・20 | 近代史料調査（史料編「近代Ⅰ」の集合校正） |
| 1・23 | 第50回 近代専門部会（史料編「近代Ⅰ」の校正、史料編「近代Ⅱ」の史料収集計画） |
| 1・25 | 近世史料調査（史料編「近世Ⅲ」の筆写史料の検索） |
| 1・28 | 中世城査（事前草刈り作業） |
| 1・29 | 第45回 現代専門部会（通史編「現代Ⅰ」編集校正） |
| 1・30 | 自然史料調査（植生図作成、航空写真との照合） |
| 2・3～9 | 近代出張調査（福島県立図書館、北海道由仁町） |
| 2・4 | 近代史料調査（史料編「近代Ⅰ」の集合校正） |
| 2・5 | 現代史料調査（通史編「現代Ⅰ」の編集校正） |
| 2・6～7 | 近世史料調査（熊本大学附属図書館、近世史料集原本照合） |
| 2・8～9 | 近代史料調査（史料編「近代Ⅰ」の集合校正） |
| 2・10 | 第35回 中世専門部会（通史編「中世」項目案の検討） |

や大分県国東の富貴寺などは今日に残るその代表的遺構で、県下では球磨郡湯前町・城泉寺（鎌倉時代前期）などがある。熊本市内にもそうした阿弥陀堂がいくつもあつたと思われるが、建物などの遺構はすべて失われ、わずかに井芹阿弥陀堂の焼痕ある阿弥陀像残欠や本像などが残るのみである。だが、これらのは、従来あまり顧みられることのなかつたこの地に、平安時代後期にすでにこうした阿弥陀堂を営むだけの教養と経済力をもつ有力者がいたことを物語る。

本像は、経年劣化と後世の稚拙な補修ゆえに造立当初の美術的生命は既に失っているが、古文書などの乏しいこの時代の文化や歴史を語る具体的な資料として、まことに貴重な遺品なのである。

銘文
〔膝裏墨書銘〕

一

此造楠木
次奉寄
進

2:12 近代史料調査（史料編「近代I」の集合校正）
2:17 近代史料調査（近世史料集校正）
2:14 市史編さんだより座談会

2:20~21 中世出張調査（法政大学能楽研究所）

2:20 現代史料調査（消防に関する聞き取り調査）

2:21 第31回 自然専門部会（平成九年度事業計画）

2:24 近代史料調査（史料編「近代I」の口調整）

2:25 近代史料調査（史料編「近代I」の集合校正）

2:26 現代史料調査（通史編「現代I」の編集校正）

2:27 近代史料調査（史料編「近代I」の原本昭合）

2:27 近代史料調査（史料編「近代I」の集合校正）

2:28 近代史料調査（史料編「近代I」の集合校正）

2:29 現代史料調査（通史編「現代I」の原本昭合）

2:30 現代史料調査（史料編「近代I」の集合校正）

2:31 現代史料調査（史料編「近代I」の集合校正）

2:32 現代史料調査（史料編「近代I」の集合校正）

2:33 現代史料調査（史料編「近代I」の集合校正）

2:34 現代史料調査（史料編「近代I」の集合校正）

2:35 現代史料調査（史料編「近代I」の集合校正）

2:36 現代史料調査（史料編「近代I」の集合校正）

2:37 現代史料調査（史料編「近代I」の集合校正）

2:38 第42回 近世専門部会（筆写史料の検索）

2:39 近代史料調査（史料編「近代I」の原本昭合）

2:40 第51回 近代専門部会（史料編「近代II」の史料収集計画）

2:41 現代史料調査（通史編「現代I」の集合校正）

2:42 第49回 部会長会議（各部会の進行状況、略年表の体裁）

3:14 近代史料調査（史料編「近代I」の集合校正）

3:17 第36回 中世専門部会（平成八年度事業報告、平成九年度事業計画、通史編「中世」の編集校正）

3:18 現代史料調査（通史編「現代I」の編集校正）

3:20 中世史料調査（池上城調査）

3:21 自然史料調査（通史編「自然、原始・古代」第四章生物（動・植）分野の打ち合わせ）

3:22 近代史料調査（史料編「近代I」の集合校正）

近世史料調査（筆写史料の検索）



〔背板墨書銘〕
「享保壬寅七年
右聖武天皇御□行□大僧上御作
〔阿弥陀佛八幡大菩薩ト現ス
肥後國飽田郡鹿子木八十丁内庄村守護法佛
〔桑鶴村寂靜〕」

| 法 量 | 像 高 | 八四・五 | 樟材 一木造 彫眼 | 品質・形状 |
|--------|--|--|-----------------|-----------------|
| | 背景（後補） | 膝前二材（後補） | 樟材 一木造 彫眼 | 樟材 一木造 彫眼 |
| | 幕先別材（後補） | 幕先別材（後補） | 樟材 一木造 彫眼 | 樟材 一木造 彫眼 |
| | もと頭・体幹部を一材から彫出し、頭・体幹部をとおして背面から内刳を施し、背板を当てていたと見られる。本体・膝前ともに朽損著しく後補材で修理する。 | もと頭・体幹部を一材から彫出し、頭・体幹部をとおして背面から内刳を施し、背板を当てていたと見られる。本体・膝前ともに朽損著しく後補材で修理する。 | 樟材 一木造 彫眼 | 樟材 一木造 彫眼 |
| | | | | |

昭和二年現在

熊本県下の新聞雑誌

近代専門部会

水野公寿

『新熊本市史 史料編 第九卷』は明治八年以降昭和二〇年に至る諸種新聞から重要記事を史料として編集したものである。その際、採択した白川新聞、熊本新聞など一二二種類の新聞について、巻末に解説を執筆した。

その際、若干の新知見を加えることができたが、「大熊本新聞」については不明なことが多く、創刊については大正七年ごろ、政治的には政友会に批判的であると推定を記した。この推定が正しいかどうか気になっていたが、『新聞雑誌社特密調査 昭和二年 警保局』（昭和五四年一〇月 大正出版株式会社刊）によつて、推定に誤りがないことが判つた。この内務省警保局調査の影印本によると「大熊本」（昭和二年一月現在）は大正七年八月一五日に創刊され、社長本田真規（民政）、発行人本田猛登、内容は「民政濃厚」の傾向をもち、日刊で毎月三万部、頒布区域は熊本市、飽託郡、八代郡となつてゐる。この影印本によると、新聞の題号は「大熊本」であるが、昭和二年一月の原物によると「大熊本新聞」であり、調査間違ひであろう。現存す

る最後の号、昭和三年九月二三日号の題号も「大熊本新聞」である。

この影印本は、内務省警保局による昭和二年一月現在の全新聞雑誌についての調査であり、各紙の党派及び政治的傾向と発行部数を記し、貴重な史料である。

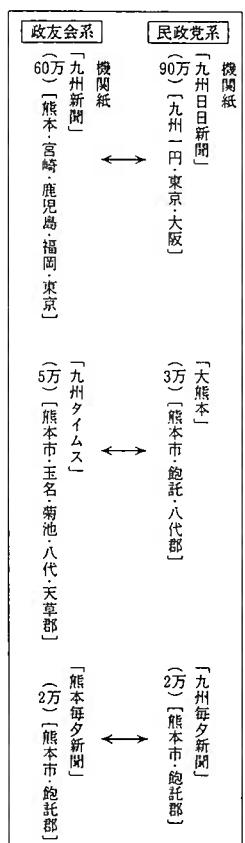
この史料によつて、昭和二年一月現在の熊本の新聞の発行状況について記しておきた。い。当時熊本県下には四四の新聞雑誌社があり、それを政治的党派及び政治的傾向によつてわけると、民政党系八、政友会系一二、中立一三、政治的傾向なし一一となつてゐる。

刊行日別では、日刊八（民政党系四、政友会系三、中立一）、月一〇～二回刊一六、月一回刊一六、年三～四回刊二、不定期刊二である。なお、九州各县の新聞雑誌の総数（政友系、民政系）を示すと、福岡一四三（三八、二三）、大分七二（一八、一六）、長崎五五（一一、一四）、熊本四四（一二、八）、鹿児島三三（一二、五）、佐賀三一（七、三）、宮崎二七（三、五）である。

ほかに無産政党系が福岡四、鹿児島一、長崎一があり、他は中立である。

熊本県下の日刊紙を中心みると、政党における民政党と政友会の対立を背景として、次のような対抗関係があつた。「（一）内は毎月の発行部数、「（一）内は頒布先を示す。」

| | | |
|--------|--------|---------------------------------------|
| 3 : 26 | 第 46 回 | 現代専門部会（通史編「現代 I」）編集 校正（正） |
| 3 : 26 | 3 : 27 | 近代史料調査（史料編「近代 I」）の集合校 始「古代」の原稿進捗状況 |
| 3 : 29 | 3 : 30 | 中世史料調査（文化財巡査・北都町一円） |
| 4 : 1 | 4 : 2 | 第 47 回 現代専門部会（通史編「現代」）の編集 |
| 4 : 5 | 4 : 5 | 中世史料調査（巡査調査・一本木、画図町重富） |
| 4 : 7 | 4 : 8 | 近代史料調査（市立図書館、史料撮影） |
| 4 : 8 | 4 : 8 | 近代史料調査（史料編「近代 I」）の史料整理 |
| 4 : 11 | 4 : 11 | 現代史料調査（通史編「現代」）の編集 |
| 4 : 12 | 4 : 12 | 近世史料調査（史料編「近世 III」）の編集 |
| 4 : 13 | 4 : 13 | 中世史料調査（池上城実測調査） |
| 4 : 14 | 4 : 14 | 第 52 回 近代専門部会（平成八年度事業報告、平成九年度事業計画） |
| 4 : 16 | 4 : 16 | 近代史料調査（史料編「近代 I」）の史料整理 |
| 4 : 19 | 4 : 19 | 現代史料調査（通史編「現代」）の編集 |
| 4 : 21 | 4 : 21 | 中世史料調査（池上城実測調査） |
| 4 : 25 | 4 : 25 | 現代史料調査（通史編「現代」）の編集 |
| 4 : 26 | 4 : 26 | 近世史料調査（史料編「近世 III」）の編集 |
| 4 : 27 | 4 : 27 | 中世史料調査（池上城実測調査） |
| 5 : 8 | 5 : 8 | 第 44 回 原始・古代専門部会（原稿の進捗状況、担当分野の年表構成） |
| 5 : 10 | 5 : 10 | 近世史料調査（史料編「近世 III」）の編集 |
| 5 : 11 | 5 : 11 | 中世史料調査（中世文化財「仏像」本調査、旧北部町） |
| 5 : 12 | 5 : 12 | 第 53 回 近代専門部会（平成九年度調査計画） |
| 5 : 13 | 5 : 13 | 自然史料調査（通史編「自然、原始・古代」）の「水」分野打ち合わせ |



民政・政友の両系統とも中心をなす機関紙と、その周辺に同系列の朝刊紙及び夕刊紙があり、機関紙を援護する役割を果たしている。

この他に民政党系では「筑後新聞」(日刊

一五万部、発行所熊本市)が福岡県向けに発行されていた。日刊の中立紙に「九州毎日新聞」があつたが、政党紙にはさまれて発行部数は月三万部(一日平均一〇〇〇部)にすぎなかつた(頒布区域は熊本市、飽託・八代郡)。二大政党の機関紙発行部数は次のように変遷している。

| 出 典 | 九州新聞 | | 年 明治43年 (1910年) |
|-----------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|
| | 熊本県統計書 | 年 2,850,000部 (30.5%) | 年 6,486,000部 (69.5%) |
| 熊本市統計書 | 年 5,126,200部 (36.1%) | 年 9,084,000部 (63.9%) | 大正5年 (1916年) |
| 影印本 | 月 600,000部 (40%) | 月 900,000部 (60%) | 昭和2年 (1927年) |
| 「伊豆富人伝」 一五〇頁 | 1日 12,000部 (27.3%) | 1日 約32,000部 (72.7%) | 昭和17年頃 (1942年) |

州新聞」は、戦時下一県一紙の国策により合併し、「熊本日日新聞」が創刊され(昭和一七年四月一日)、政党機関紙の時代は終わり、「厳正公平なる新聞」を社是にかかげた。

発行所を地域別にみると、日刊の八紙は

「九州タイムス」(宇土町)をのぞいて、熊本市で発行されている。郡部では高瀬町で両派

の新聞が発行され、民政党系の「玉名民政新聞」(月三回刊、月六〇〇〇部)、「玉名郡」(月三回刊、月六〇〇〇部)に対して、政友会系の「肥後昭和新聞」(月一〇回刊、月一万部)が対抗していた。このほか地域の政党

新聞として、民政党系新聞は御船町(西部評論)、本渡町(天草新聞)で発行され、政友会系新聞は宇土町(前出、九州タイムス)、

上益城郡上島村(現嘉島町、昭和日日新聞)、佐敷町(三太郎タイムス、城南新報)、水俣町(葦北実業新聞)、人吉町(人吉新報)で

発行されていた。

先に示した「新聞雑誌社特査調査」の原本所有者羽島知之氏の同書「解説」に「関係各方面の方々に広くご利用ねがえれば望外の喜びである」とあり、熊本県の部分を掲載させていただくこととした。

この発行部数の変遷は両紙が政党機関紙なので、両党の県下における勢力の消長を直接反映していると考えられるが、同時にまた新聞経営の固有の問題—編集方針、紙面構成、

記事内容など読者の要望にどれだけ答えているか両紙の内容を比較検討してみる必要がある。

中世史料調査(中世文化財「仏像」本調査、旧北部町)
第32回 自然専門部会(平成八年度事業報告、平成九年度事業計画)
第50回 部会長会議(平成八年度事業報告、平成九年度事業計画)

中世史料調査(史料編「近世Ⅲ」の編集)
自然史料調査(通史編「自然、原始・古代」の「水」分野打ち合わせ)
近代史料調査(史料編「近世Ⅲ」の編集)
原始・古代史料調査(通史編「自然、原始・古代」の年表原案提出)

近代史料調査(通史編の章立て)
現代史料調査(通史編の章立て)

6.19 現代史料調査(通史編「現代Ⅱ」の章立て)
6.10 中世史料調査(通史編「中世」の執筆内容)

6.23 自然史料調査(通史編「自然、原始・古代」の「水」分野打ち合わせ)
6.24 第43回 近世専門部会(史料編「近世Ⅲ」の編集)

6.27 第20回 新熊本市史編纂委員会(平成八年度事業報告、平成九年度事業計画)
第五回 新熊本市史発刊報告会



| 農 民 魂 | 西 部 評 論 | 印 刷 業 報 | 青 年 聯 盟 | 熊 本 の 実 業 | オ ト ヅ レ | 鎮 西 医 海 時 報 | 天 草 新 聞 | 黎 明 新 報 | 飽 託 の 業 | み く に | 題 号 | |
|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|----------------------------|---------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|----------------------------|
| | | | | | | | | | | 傾 向 | 政治的 派 及 | |
| ナ シ | 近 シ | ナ シ | 中 立 | ナ シ | 漫 民 | ナ シ | 中 立 | 中 立 | 中 立 | 中 立 | 年 月 日 創 刊 | |
| 日 一 年 十 二 年 昭 和 | 五 月 二 十 三 年 昭 和 | 十 一 月 大 正 | 日 月 二 十 三 年 昭 和 | 日 月 五 年 大 正 | 日 月 十 五 年 大 正 | 日 月 二 十 五 年 大 正 | 日 月 二 十 五 年 大 正 | 日 月 二 十 五 年 大 正 | 日 月 二 十 五 年 大 正 | 日 月 二 十 五 年 大 正 | 日 月 二 十 二 年 大 正 | |
| 四 年 回 | 一 月 | 一 回 | 一 月 | 一 月 | 一 月 | 一 月 | 一 月 | 一 月 | 一 月 | 一 月 | 一 月 | |
| 佐 々 木 憲 徳 | 浜 村 國 弘 | 松 岡 重 喜 | 吉 田 千 之 | 元 山 | 熊 本 市 行 幸 町 | 岩 上 | 球 磨 郡 人 吉 町 | 島 巣 | ○ 小 島 栄 吉 | 天 草 郡 本 渡 町 | 須 崎 | 吉 見 教 英 |
| 上 益 城 郡 大 島 村 | 上 益 城 郡 御 船 町 | 熊 本 市 昇 町 三 丁 目 | 上 益 城 郡 広 安 村 | 敦 | 進 | 進 | 熊 本 市 本 庄 町 四 四 | ○ | 熊 本 市 本 庄 町 四 四 | 飽 託 郡 画 園 村 | 田 上 朗 | 天 草 郡 白 坪 村 |
| 二 百 部 一 回 | 二 百 部 每 月 | 二 百 部 每 月 | 二 百 部 每 月 | 二 百 部 每 月 | 二 百 部 每 月 | 二 百 部 每 月 | 二 百 部 八 代 郡 | 三 百 部 每 月 | 三 百 部 每 月 | 三 百 部 每 月 | 三 百 部 每 月 | 三 百 部 每 月 |
| 上 益 城 郡 ナ シ | 熊 本 市 | 熊 本 市 | 上 益 城 郡 | 熊 本 市 | 熊 本 市 | 熊 本 市 | 球 磨 郡 | 熊 本 市 | 天 草 郡 | 飽 託 郡 | 熊 本 市 | 天 草 郡 |
| 佐 々 木 憲 徳 | 浜 村 國 弘 | 松 岡 重 喜 | 吉 田 千 之 | 紫 藤 章 | 岩 上 | 島 巣 | 時 雄 | 金 子 弥 助 | 須 崎 | 森 実 美 | 吉 見 教 英 | 氏 名 |
| | | | | | | | ナ シ | | | | | 党 派 |
| | | | | | | | 学 山 崎 医 長 | | | | | 氏 名 |

新熊本市史

第21巻 第5回配本

◇通史編 第8巻 現代I
(本文1,015ページ)

- 「新熊本市史」では初の通史編刊行
- 昭和20年8月15日の終戦から昭和46年までを「新しい時代の訪れ」「高度成長の光と影」の2編で構成
- 戦後の混乱と物資不足、民生の不安定の中で復興に立ち上がる市民の底力、そして日本経済の発展に伴う市民生活のさまざまな実態を多様な視点から記述

◇史料編 第6巻 近代I
(本文1,053ページ)

- 近代熊本市の黎明期史料をまとめたものとしては初の刊行
- 明治維新前後からおおむね日露戦争までの史料422点を収録
- 収録史料は未発表・初公開のもの、時代や事件を代表するものの二つに重点をおいて選択
- 政治/行政財政/産業/経済/軍事・警察・消防/社会/教育/文化・宗教の7章で構成

史料編 第1巻 考古資料
(頒布価格 5,700円)

史料編 第2巻 古代・中世
(頒布価格 3,700円)

史料編 第3巻 近世I
(頒布価格 3,700円)

史料編 第4巻 近世II
(頒布価格 4,800円)

史料編 第8巻 現代
(頒布価格 3,700円)

史料編 第9巻 新聞上近代
(頒布価格 3,700円)

史料編 第9巻 新聞下現代
(頒布価格 3,700円)

別編 第1巻 絵図・地図
(頒布価格 10,300円)

別編 第2巻 民俗・文化財
(頒布価格 5,300円)

問い合わせ先 申込み先

〒860 熊本市手取本町1-1 熊本市大窓1丁目7-47
熊本市市史編纂課 熊本県書店商業組合
TEL(096)328-2111 TEL(096)344-3831
頒布価格は税込み、送料別 FAX(096)344-5420

好評発売中

新刊案内

| 史料調査にご協力いただいた方々(1月~6月) | | |
|------------------------|----------------|----------------|
| 村井 正 (水前寺) | 熊本大学薬学部同窓会 | 宮内庁正倉院事務所 |
| 岡崎 全修 (錢塘町) | 熊本大学附属図書館 | 奈良国立文化財研究所 |
| 南部 博之 (上南部町) | 開新高等学校 | 東京市政調査会市政専門図書館 |
| 小川 和一 (島崎) | 福島県立図書館 | 都市問題資料室 |
| 松尾 正義 (池上町) | (株)弘乳舎 | 栃木県立図書館 |
| 飯田 政教 (東大阪市) | 九州旅客鉄道(株) | 北海道夕張郡由仁町 |
| 圭室 文雄 (東京都) | 九州旅客鉄道(株)北九州本社 | 市立図書館 |
| 小松 順一 (北海道夕張郡由仁町) | 国立国会図書館 | 後藤是山記念館 |
| 熊本県立図書館 | 国立公文書館 | 市文化課 |
| | | (敬称略) |

編集後記

▽ 市制百周年事業として着手した「新熊本市史」の編纂事業も、編纂委員、専門員の先生方をはじめ、多くの市民のご協力のもと、一〇周年の節目の年を迎えました。

▽ 次回の配本は、「史料編第五巻近世III」と「通史編第一巻自然、原始・古代」、「通史編第二巻中世」の三巻を予定しております。

各専門部会では、原稿の仕上げが急ピッチで進められています。担当の専門員の先生方には、大変なご苦労・ご努力をいただいております。ご期待ください。

▽ 新熊本市史編纂委員会近代専門部会専門員の谷川憲介氏(元県立図書館副館長)が平成九年六月三十日で御勇退されました。

谷川専門員は、「史料編第六巻近代I」の編集・刊行にご尽力を頂きました。ここにお礼を申し上げます。

史料の提供にご協力を

皆さんの身近に「史料」がありましたら、ご提供をお願いします。

〒860 熊本市手取本町1-1
熊本市市史編纂課
TEL 096-328-2038